ある朝

ベッドの中に
ひとり取り残されたまま眺める
朝

ダイニングテーブルに椅子が４脚
薄紫色をしたクロス
無造作に広げられた新聞に多くの文字がある

透明な水の中に潜っているような
一方で隠れているという意識
もう一方で水面上の世界への気後れ

街中のお目出度い連中が我先にと
断崖に向けて殺到する幻想を抱くが
私は預言者であることを願ってはいない

現代が困難な時代であるのか
それとも気楽な時代であるのか
それは自己を放棄できるかで決まるらしい

私は知っている
この病を呼ぶのは孤独ではない
孤独への憎悪が病を呼ぶのだ、と

表情には特に気を付けなければならない
孤独であることを隠さなければならない
見破られぬよう・・・

部屋には誰もいない

眉をひそめる者は誰もいない、しかし
この部屋自体が私を蔑んでいる
お前は孤独を隠し持つ異端者だな、と

(2011.8.20)